興福寺西室の調査（平城第516次）

興福寺は中金堂と講堂の東・西・北をコの字型に取り囲む三面僧房を有しており、西僧房は「西室（にしむろ）」と呼ばれています。各僧房の外側には「小子房（しょうしぼう）」と呼ばれる建物が並行して建てられていました。西室は720年代に建立されましたが、8度火災に遭い、享保2年（1717）の焼失以後、再建されることはありませんでした。また、西面の小子房は西室より早く廃絶したとみられます。今回の発掘調査は、興福寺が進めている『興福寺境内整備基本構想』にもとづいて、西室の南半分を対象とするもので、調査面積は985㎡、調査期間は2013年6月3日から10月11日までです。

調査の結果、西室の礎石および礎石据付穴・抜取穴、基壇外装等を確認しました。礎石は大きさが1m前後の安山岩の自然石で、8石が創建当初の位置を保っていました。7度の再建の際に、創建建物の位置・規模を踏襲していたことがわかります。また、桁行の各柱間に2基ずつ、間柱（まばしら）または床束（ゆかづか）とみられる小型の礎石および礎石据付穴・抜取穴を確認しています。

調査区内では、西室のうち桁行7間×梁行3間分を検出しました。建物規模を復元すると、南北約62.7m、東西約11.8m、桁行10間×梁行4間、柱間寸法は桁行の南端2間が約16尺、以北が約22.5尺等間、梁行は約10尺等間になります。『興福寺流記』等の資料から桁行11間に復元されてきた従来の復元案とは異なる柱割であることがあきらかになりました。

調査区南東の拡張区では、西室の基壇外装と雨落溝を確認しました。基壇外装は凝灰岩製で、地覆石と羽目石が残存します。これにより、基壇の南東隅が確定しました。建物から基壇の端までは、南面で2.1mです。東面は地覆石の外側が削られていましたが、2.2mに復元できます。また、基壇の高さは約45cmに復元できます。

西室の西側では、大型の南北棟掘立柱建物を検出しました。桁行7間以上、梁行2間で、桁行の各柱間に2基ずつ、間柱または床束とみられる小型の掘立柱穴を確認しました。この建物は、柱筋を西室と揃えており、小子房の可能性が指摘できます。

しかし、いくつかの問題点もあります。礎石建物の僧房に掘立柱建物の小子房が併存するのかということ、小子房の間柱と想定される柱穴の大きさ、形、深さが不揃いであること、西室と掘立柱建物の間が約2.5mしか離れておらず軒がぶつかってしまうことです。更に、西室と小子房が描かれる中世の絵画資料と今回検出した遺構とは様子が異なっていることも問題です。

今回の調査では、西室の礎石や基壇外装を確認し、西室の様相があきらかになりました。いっぽう、小子房についてはまだ検討すべき課題が多いといえます。興福寺をはじめとする古代寺院僧房や、興福寺諸資料の調査の進展がまたれます。

（都城発掘調査部　番 光）

調査区全景（北から）

西室基壇外装（南西から）